

# JLTA Newsletter No. 46

## 日本言語テスト学会

### The Japan Language Testing Association

JLTA Newsletter No. 46 発行代表者: 渡部良典 2019 年 (平成 31 年) 3 月 31 日発行  
発行所: 日本言語テスト学会 (JLTA) 事務局  
〒270-1695 千葉県印西市平賀学園台 1-1 順天堂大学さくらキャンパス  
小泉利恵研究室 TEL: 0476-98-1001 (代表) FAX: 0476-98-1011 (代表)  
e-mail: rie-koizumi@mwa.biglobe.ne.jp URL: <http://jlta.ac>



\*\*\*\*\*

## 病とテスト

松本 佳穂子

私が第 22 回全国研究大会の中止を知ったのは、入院中の病院でした。まだその時には震災の被害状況があまり分かっていなかったのも、何よりも、大会準備に多大なご尽力を下さっていた北海学園大学の先生方のことを思って残念な気持ちで一杯になりました。その後、テレビで被災地の惨状を知り、病室から本務校の札幌キャンパスの先生方や学生さん、札幌在住の友人の無事を確かめるメールをしたりしました。あれから半年が過ぎようとしている今、是非近い将来にもう一度、北海学園大学で研究大会が開かれることを願っています。

私自身は編集委員会の委員長を 3 年間やらせて頂いて、採用・不採用に拘わらず、様々な切り口の興味深い論文に触れて本当に勉強になりました。最後の 1 年は急に入院したため、副委員長の柳川先生と編集委員の小山先生に大変お世話になりました。ニュースレターの巻頭言にふさわしいような内容がなかなか思いつかなかったのも、初めて手術・入院をした経験によって、いつもとは違う側面からテスト、測定、評価について考えたことを綴らせて頂きます。

実は病気になるということは、検査漬けになるということで、自分でも思い出せないくらいの数の検査をしました。検査もある種のテスト、その時点の身体状態の測定ですので、いつも測定結果にドキドキしながら判定を聞きました。測定結果は医師によって解釈されて説明されるという点で、テスト結果の解釈とよく似ています。これまであまり何も考えずに人の人生を左右する gate-keeping test のことを議論したりしてきましたが、病院での検査もそれによく似ていることに気づきました。大きな違いは努力の結果を測るものではないという点ですが、腫瘍が良性か悪性か何週間も判定を待つのは、大学受験で合否連絡を待った時の気持ちと似ていました。もちろん重篤さは違いますが、腫瘍が悪性だったら治療法を選択しなければならないところと、受験で不合格だったら浪人するかあまり気が進まない大学に行くか決めなければならないところも似ています。20 世紀初頭、ニューヨークの Ellis 島で病理検査や知能テストで仕分けられたという移民は、自分で選択することさえできなかった悲惨な例です。

担当医師はうるさい患者だと思ったでしょうが、私はつい「なぜそう言えるのですか？」というエビデンスを求めてしまいました。腫瘍が組織を外から採取できない場所だったので、最初胸水を調べてそこから「悪性が疑われる」と言われ、医師の説明も悪性腫瘍を想定したものになって行きました。ところが、実際に手術中に採取した組

織の生検は悪性ではありませんでした。とても誠実な何でも話して下さる先生でしたので、「どうしてあの時胸水にガン細胞があるという結果が出たのですか？」と後で聞きましたら、「私にも分からないのですが、あの検査は機械でなく人間がやっているのです...」という答が返ってきました。そこで、私は「私たちも研究でよく測定誤差を考えるのですが、そういうものだったということですか？」と聞いたのですが、それに対しては「そうかも知れませんが、経過観察を見ていくしかありません。」という正直だけれども曖昧なお答が返ってきました。退院してから2回経過観察の検査をしましたが、特に異常は発見されず、先生の説明から胸水の問題は次第に消えて行きました。

様々な病状のもとになっていた腫瘍を完全に摘出して下さった医師団に心から感謝する一方で、医学の世界でも病状に合った妥当な検査をし、誤差を含むであろうそのデータを解釈して病因を正確に確定し、最大の stakeholder である患者とその家族に納得できる説明をしなければならないという点で、この経験から、改めてテストや評価に関わる者として、評価ツールの作成・選択やデータの処理・解釈に真摯に取り組まなければならないと痛感させられました。医師たちが、私のように何でも質問する患者に与える説明と、ひたすら落ち込んでいる患者に対してする説明を変えているところも、私たちが能力やタイプが違う学生に対してテスト結果の説明やフィードバックを柔軟に変えるところと似ています。

もう一つ、病気になって考えたことにメタファーや波及効果の問題があります。今は日本人の2人に1人が悪性腫瘍（ガン）になり、実際は3分の2はある程度生き永らえ、半分ぐらいは完治或いは寛解状態を迎えます。ただ、人々は未だに「ガン＝死の病」というイメージを持っているので、そう言われただけで取り乱したり、苦しむよりは先に死にたいと思ったりします。メディアなどが悲惨な例を大きく取り上げることもあり、人々が正確な事実よりもメタファーと

してガンや AIDS を「死に至る病」と想起してしまう現象について、アメリカの哲学者スーザン・ソナグは「隠喩としての病い」の中でこう言っています。「病気に対処するには — 最も健康に病気になるには — 隠喩がらみの病気観を一掃すること、なるたけそれに抵抗することが最も正しい方法であるということだが、それにしても、病者の王国の住民となりながら、その風景と化しているわけばしい隠喩に毒されずにすまずのは殆ど不可能に近い。」これをテストの問題に置き換えれば、教師も受験者も誰もが妥当性や信頼性を理解せずにあるテストやその点数を絶対的なものと信じ、教育がテストのために行われたかつての「受験地獄」の風景と同じです。ソナグが言うように、世の中にメタファーが波及することは止められないので、私たちはテストの専門家として、正しい波及効果をもたらす情報を発信し続けていかなければならないと強く思います。ガンを神が自分を良い人間にするために与えた試練だとする「キャンサー・ギフト」という考え方があるように、あるテストに不合格だったり、ひどい点を取ったりすることから、実は自分の弱点を知り能力を向上させるヒントが得られるという側面もあるのだということがもっと強調され、受験などでのテストの使用方法がより柔軟で複線的なものになること、様々なアセスメントの可能性にもっと目が向けられる時代が来ること、そして私たちの学会がそれに貢献できることを願ってやみません。

**Report on The Special  
Lecture by the JLTA Best  
Paper Awardee  
Dec. 1 (Sat), 2018  
Chuo University**

**Lecture Title: The Assessment  
Beliefs and Practices of English  
Teachers in Japanese  
Universities  
Paul WICKING (Meijo University)**

**Reporter: Kiwamu KASAHARA**  
(Hokkaido University of Education)

On December 1, 2018 at Chuo University the 2018 JLTA Best Paper Awardee, Dr. Paul Wicking, gave a 30-minute lecture on his award-winning paper. He was given this opportunity because the Best Paper Award Ceremony as well as the 2018 JLTA annual conference was canceled due to the big earthquake last September in Hokkaido.

The purpose of his study was to clarify the beliefs and practices in assessment of English teachers in Japanese universities. Understanding the beliefs and practices of teachers who make and give tests can lead to further improvement in testing policies and guidelines. Dr. Wicking adopted a mixed research method including both qualitative and quantitative surveys: case studies of several English courses and a teacher questionnaire were conducted. The questionnaire had 148 respondents consisting of 108 English natives and 40 non-natives. The results showed that more than 70% of the participants used original performance-based assessment tasks and original paper-and-pencil assessment tasks. More than 80% of respondents used testing items that were developed by themselves. Another valuable finding was about their beliefs in purposes of assessment. Their purposes were mainly student-centered: to obtain information on student progress, to provide feedback, to diagnose student

strengths and weaknesses, and to motivate students to work harder. These beliefs could be a reflection of the fact that those teachers felt little pressure to prepare students for high-stakes examinations, unlike high school English teachers.

On the other hand, the participants did not see the benefits of the assessment for diagnosing strengths and weaknesses in their own teaching. Moreover, they did not report using self- and peer-assessment to a large extent. Dr. Wicking recommended engaging students in these types of assessments, and using rubrics or checklists when giving feedback.

It was our honor to be given a chance to listen to his invaluable and constructive lecture. JLTA members hope that Dr. Wicking will continue to make a great contribution to testing research.

**Report on The 48th JLTA  
Research Seminar  
Mar. 1 (Fri)**

**早稲田大学**

**題目:「大学英語ライティング授業  
における要約作成指導と評価」**

**報告者 石井 雄隆 (早稲田大学)**

2019年3月1日(金)に早稲田大学にて「第48回日本言語テスト学会研究例会」が開催された。テーマを「大学英語ライティング授業における要約作成指導と評価」とし、第1部の研究発表と第2部のワークショップの二部構成で行われた。

第一部では、まず澤木泰代先生(早稲田大学)の「アカデミック・ライティング授業における要約作成指導と評価の課題」という発表において、今回のテーマを対象とした三年間にわたるプロジェクトの概要(採点基準作成と学生の要約解答の量的分析、学生の要約解答プロセスの質的分析から成る)の説明があった。

次に同じく澤木先生による「日本人大学生の要約ライティング力～要約内容の評価～」という発表において、技能統合タスクを評価するために開発された「統合」と「言語」の2つの分析的尺度それぞれの信頼性や相互の関係性の検証結果が報告された。

最後に、本報告書執筆者の石井雄隆による「キー入力記録と刺激再生法を用いた技能統合タスク遂行プロセスの分析」という、キー入力記録と刺激再生法を用いた日本人英語学習者のオンライン修正について焦点を当てた発表があった。結果として、技能統合タスクに固有の修正傾向や、第二言語として英語を学んでいる英語学習者と日本人英語学習者の修正傾向の違いなどが明らかになったことが報告された。

第二部は澤木泰代先生と本報告書執筆者、太原達朗氏(早稲田大学大学院)による「分析的尺度を使った要約ライティング評価」というタイトルのワークショップが行われた。このワークショップでは、まず実際に学習者が解答したタスクに取り組み、グループで原文の要点をどのようにまとめるかを検討した。その後、前述の「統合」尺度によって評価されたサンプルを用いて、実際に学習者のライティングを評価し、最後に採点した結果をグループで共有すると共に、採点方法や結果に関して全体で討議した。

質疑応答では、「言語」と「統合」の二つの観点を明確に区別することの難しさや、教室現場で技能統合を教える場合の課題などについて活発な意見交換が行われた。技能統合タスクは、読む能力と書く能力の両方を測定することができる反面、それをどのように指導・評価していくかについては知見の蓄積がまだ十分なされていない。この研究会がその一つのきっかけになれば幸いである。約40名のご参加いただいた方々に御礼申し上げる。



**海外の学会・研究会  
参加報告  
World Conference Reports**

**The 2018 KELTA Conference  
報告者 横内 裕一郎(弘前大学)**

大会名 : The 2018 KELTA Conference  
開催日 : 2018年11月10日  
テーマ: English Language Assessment & Technology in the Era of the 4th Industrial Revolution  
開催地 : Korea University, Seoul, Korea

JLTAとKELTAはお互いの研究大会で発表者を派遣し合う事業を続けている。2012年に私が

JLTAに入会した当時から昨年までにKELTAに派遣されてきた先生は一線級の方ばかりで、正直なところ自分が派遣される側になるのはまだ早いとまで思っていた。今年度は渡部良典会長も参加して下さるということで安心しきっていたところ、KELTAから基調講演を担当できないかと打診があった。私では格落ちで JLTA の顔に泥を塗るのではないかと最初は固辞させて頂いたが、渡部会長が背中を押してくださったこともあり講演を引き受けることにした。

大会では基調講演の3番目として“Application of Technology to Language Testing in Japan: From Entrance Examination to Classroom Assessment”という演題で日本の入試制度を振り返り、今後どのような技術が大学入試に導入されるのか、そしてどのような技術が現在教室内で行われるような高いコストを掛けることのできないテストに応用できるのかを実例を含め紹介させていただいた。

特に印象に残った発表は、上海交通大学のYan Jin先生の発表で、College English Test (CET) におけるライティングの自動採点の活用についての講演だった。年間の受験者数が800万人を超えるかというCETを約2万人の訓練された評価者が採点しているということで中国の規模の大きさを実感した。その負担軽減のため、自動採点を導入するということが、それを一つの機関が責任を持って果たそうとしていることが非常に印象的だった。また、祥明大学校のHeejeong Jeong先生による発表では、訓練を十分に受けた評価者とそうでない一般の語学教員との間で評価の質の違いがあるかを2種類の評価尺度を用いて比較がなされた。教員の2群間で評価の質に大きな差はないものの、評価への心理的負担や評価への考え方の違いがあることが報告された。パフォーマンス評価の際に評価者が何を思いながら評価をしているのか、という観点は管見ではあまり見かけたことがなかったため、この発表は特に印象に残った。

基調講演を除き、22の発表があった中で、その3〜4割ほどが若手の中高教員や院生による発表で、意欲的な発表が多く見られた。オーディエンスからのコメントや質問も厳しいものもあれば、丁寧な助言も多くあり、学会全体がアットホームな雰囲気であったと感じた。今回、KELTAに派遣されて強く感じたのは、是非JLTAの学生会員や若手の先生方にこの派遣に応募してほしいということだ。私自身発表前は大きなプレッシャーを感じたがKELTAの雰囲気のおかげで無事に発表終えることができた。来年度以降もKELTAからの派遣依頼があると思われるが、是非若手の会員の皆様には積極的に申し込んでほしいと思う。

## 書評

### Book Reviews

#### 『教育・心理・言語系研究のためのデータ分析』 平井明代(編) 2018年 東京図書

本書は、英語教育研究者や英語教育専門の大学院生にも推薦したい統計手法の実用書であり、且つ、研究用教科書としても有用である。2012年に出版された『教育・心理・言語系研究のためのデータ分析入門—理論と実践から学ぶSPSS活用法』の続編でもある。前編は、教育・心理の分野でよく用いられるt検定、分散分析や回帰分析等、パラメトリック検定手法をSPSS活用で扱っていたのに対し、続編である本書は前作に含まれていなかったクラスタ分析、階層線形モデル、一般化可能性理論、項目応答理論、コレスポンデンス分析、およびテキストマイニングを含めている。また、ノンパラメトリック検定や質的分析も加えられており、盛り沢山の統計手法が解説されている。大きな特徴として、それぞれの章ごとに適切と思われる統計

ソフトを紹介し、その分析や解説が書かれている。例えば、クラスタ分析、ノンパラメトリック検定、クロスpondens分析などには SPSS、一般化可能性理論には GENOVA と mGENOVA、項目応答理論には Facets や R (irtos) と EasyEstimation など、使いやすさ、リーズナブルな費用、そして精度の高さという点から各項目の統計手法が選ばれている。特に、ロバスト統計、IRT、コーパス分析の章で無償 R の使用解説は大変役に立つ。R は使用前のインストールも含め、複雑な手順を要するために、使用を躊躇したり避ける研究者や教員も多いと聞かすが、このようなわかりやすい参考書が出版されたことで R の使用者がさらに増えることが期待される。

R を使ったロバスト統計のセクションは、英語教育の学会等で調査分析を報告する研究者や大学院生には是非一読してもらいたいところである。調査分析で outlier test を叙述しないケースは多く、実際、他の学会の発表者に聞いてみると、正規性や等分散性、外れ値チェックを一切することなく検証を行って結論を出していることがしばしばあり、また教育業者作成の箱ひげ図も、四分位計算に外れ値が含まれて結果報告されているケースも多々見られる。確かに、外れ値の取り扱いに関しては、研究目的によっては最終的に閾値が恣意的である部分も否めないが、外れ値や例外値の影響を最小限に抑えて安定した推定をするよう、本書に記載してある説明を参考に外れ値チェックを勧めたい。

さらに、現場の教員に一読を勧めたいセクションが第 5 章の「項目応答理論」のテスト等化の記載である。近年、大学のみならず、中等教育機関や多くの教育機関で教育の質保証が求められる中、現場の外国語教員にとって伸長度を測るためのテストの等化は大変興味深いところだと思われる。本書では、項目応答理論のセクションの中で項目固定デザインを軸として IRT の説明をしているため、その基本となる共通受験者デザインと共通項目デザ

インが端的に説明されている。このセクションでテスト等化デザインを充分理解できるように書かれているので、言語テスト専門外の教員や中等教育の現場教員も将来的にアイテムバンクのシステムを利用することが期待でき、さらにローカルスタンダードでの評価基準設定やその見直しも本書を利用して実践できることであろう。

また、英語教育に限定されないが、近年の教育現場や教育法、学習者要因の多様化に伴い、学習者心理や学習方法など、実証的なデータから新たな理論的発見や理論構築可能性も高くなっており、帰納的な研究方法も欠かせない。その意味で、本書後半の質的分析の解説は大変参考になり、ありがたい。特に教室現場で直接指導する教員にとっては、個別の事象を対象として調査を行い、その特定の状況や価値観や文脈などを解釈してデータ分析するケースが多いため、量的な分析では見えにくい事象を発見できる。本書のナラティブ研究、現象学、エスノグラフィー、アクションリサーチ等の解説とそれらの分析方法が多くの現場教員や研究者の参考となり、今後の多様な指導法や学習者要因への情報提供と理論発展の一助になるものと願っている。

本書の構成は、前編同様、各章を通じて「理論」、「実践」、「論文への記載」という順序で作られている。理論のセクションは分析ソフトのバージョン等の変化に左右されないような基軸となる内容が説明され、実践部分では分析ツール操作手順がわかりやすく図解されている。続いて論文執筆に応用できるような記載例が書かれているため、大学院生のマニュアル本としても使いやすい構成となっている。

この充実した内容で頼りになる本書の上梓に伴い、研究者のみならず、大学院生や中等教育機関の現場教員には、前編と 2 冊合わせたセットの購入を勧めたい。

**評者 宮崎 啓（東海大学）**

## 『検証 迷走する英語入試—スピーキング導入と民間委託』 南風原朝和(編)

2018 年 岩波ブックレット

大学入試改革の一環として英語の試験に民間の4技能テストを導入し、ゆくゆくは大学入試センターによる一斉試験を廃止する方針を政府が打ち出していることに対し、多くの教育関係者から懸念の声が挙げられている。本書はこの拙速かつ強引な改革の問題点を、立場の異なる5人の識者が多角的に検証したものである。

第1章では、この本の出発点となる2018年2月の東京大学におけるシンポジウムの主催者であり、大学入試改革を議論した文科省主催の「高大接続システム会議」（以下、「システム会議」）のメンバーであった南風原氏が、改革の経緯とその問題点についてまとめている。システム会議は2015年3月から1年にわたって開催された。主な議題の1つが英語4技能試験の導入であったが、この時点ではスピーキングテストについても現在のセンター試験と同様な方法で実施することが議論されていた。民間に丸投げという考えではなかったのである。ところがシステム会議終了からわずか5か月後に、民間試験を活用して4技能を測定するという方針が文科省から突如として示される。現行のセンター試験は2020年1月をもって終了し、その後4年間は後継の共通テストと民間試験を併用させる。その後は共通テストを廃止し、資格要件を満たした（とされる）8つの民間試験のどれかを受験生は受験しなくてはならなくなる。システム会議における有識者たちの意見を反故にし、これだけの大転換を行っていないながら、なぜそうなったのかという経緯は一切説明されていない。

続いて南風原氏はこの改革に関する大きな問題点を5つ挙げている。1つ目は、高校英語教育に与える負の波及効果である。民間試験は高等学校の学習指導要領を考慮して作成されたものでは

ないからだ。2つ目は、それぞれの民間試験の異なるバージョン間で、選抜試験の精度に耐えうるくらいの標準化が可能なのかという懸念である。3つ目は、目的の異なる8つの試験が、一律に比較可能なのかという問題である。CEFRのレベルで横並びにした各試験の対照表が文科省から示されているが、これは各試験団体からの申請を基にしたもので、公式な検証はなされていない（しかも公表のたびに、各CEFRレベルに対応する同じテストの点数レンジが異なっていたりする！）。4つ目は、受験生に対する負担と経済格差の問題である。経済的・地域的に恵まれた家庭の子供ほど、様々なテストを多く受験できるため、今まで以上に地域差や経済格差が試験結果に影響することが予想される。5つ目は国大協が示したガイドラインの問題である。示された案は、①一定水準以上の結果を出願資格とする、②CEFRによる対照表に基づき、新テストの英語試験の得点に加点する、という2つである。英語という一試験だけで受験資格を認めないのは、本当に大学のアドミッション・ポリシーに合致するのかという妥当性の問題がある。また加点に関しても、対照表そのものに疑問がある以上、信頼性が保証できない。

第2章から第5章までは、執筆者がそれぞれの立場から、第1章で取り上げられた問題点を掘り下げるという形になっている。第2章は前高等学校長協会会長の宮本氏が、民間試験活用が高校の英語教育に与える負の影響、及び地域差・経済格差の問題について高校の立場から論じている。第3章では応用言語学が専門で、スピーキングテスト開発に詳しい羽藤氏が、CEFR対照表の欺瞞について鋭く指摘している。最大の問題点は「同じ生徒でも受ける試験によって段階別評価が変わり得ること」であり、文科省もそれを認めていることである。そもそもCEFRは科学的な正当性が証明された指標ではなく、あくまで「共通参照枠」という大雑把な枠組みに過ぎない。それを受験者の将来がかかる弁別に用いるのはCEFR本来の目的から大き

く外れている。第4章では英米文学が専門で、4技能試験を批判した著書がある阿部氏が、スピーキングテストを導入すれば受験者のスピーキング力が上がるというのは短絡的な考えであること、その裏に英語ビジネス産業の影響があることを指摘する。第5章では大学入試センターで元試験・研究統括官を務めた新井氏が「高大接続」の問題点を鋭くついている。高大接続問題は元来教育課程の問題であり、大学入試を変えれば解決するという問題ではないとの主張は傾聴に値する。また、センター試験は多くの大学教員が長い時間と膨大な労力をかけて作成する妥当性・信頼性の高い大規模試験であり、特に最大の受験者数を持つ英語テストは共通テストの要であると述べている。共通テストの英語を廃止すれば、共通テスト全体の基盤が崩れることが危惧されるのである。

ユリウス・カエサルは「いかに悪い結果につながったとされる事例でも、それがはじめられた当時にまでさかのぼれば、善き意志から発していたのであった」と言った。また、「人間ならば誰にでも、現実のすべてが見えるわけではない。多くの人は、見たいと欲する現実しか見ていない」とも。4技能試験導入が「善き意志」から発していたのだとしても、これだけの大きな懸念がある中で強行すれば、「悪い結果」に終わるのは目に見えている。為政者が人の意見に耳を傾けず、「見たいと欲する現実」の実現に邁進するとき、しばしば大きな悲劇が起こることは、歴史上枚挙にいとまがない。ヒトラーしかり、スターリンしかり、ポル・ポトしかりである。この改革の一番の犠牲者になるのは、将来ある高校生なのである。この本を読み、大学にいるものとして、声を上げ続けなければならないと思う。少なくとも共通テスト英語の拙速な廃止は阻止すべきではないだろうか。

評者 笠原 究（北海道教育大学）

## JLTA 事務局より連絡 Messages from JLTA Secretariat

JLTA の活動にご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。ご質問・ご意見等ございましたらお寄せください。

(1) JLTA Newsletter No. 45 で触れましたように、2018 年 9 月 6 日の北海道胆振東部地震の発生に伴い、9 月 8～9 日に北海学園大学で予定されておりました本会 2018 年度全国研究大会と総会を中止しました。**2018 年度総会**につきましては、12 月 1 日に中央大学で、最優秀論文賞受賞者講演会とともに開催し、以下が承認されました。総会資料は、12 月 25 日付で電子メールにて会員の皆様にお送りいたしました。

1. 2017 年度活動報告
2. 2018 年度活動計画
3. 2017 年度決算報告
4. 2018 年度予算
5. 学会会則改訂
6. 2018－2019 年度役員・委員名簿

(2) 日本言語テスト学会では、2019 年度より会員種別として**シニア会員を設立**することとなりました。シニア会員への年会費の割引を導入し、より広い層の方からご協力・ご支援をいただくことにより学会の発展にもつながると考えております。本件の詳細は 2 月 18 日に電子メールでお送りいたしました。シニア会員規定は、次の通りです。

### 日本言語テスト学会 シニア会員規程

#### 1. 条件

- ・当該年度の 4 月 2 日時点での満年齢が 65



歳以上で、常勤・非常勤職を有しない方

## 2. シニア会員になるための手続き

・「JLTA シニア会員申請書」  
([http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=122](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=122) よりダウンロード可) を記入し、年齢を証明する書類を添付の上、日本語テスト学会 会員管理センターに郵送で提出する。

年齢を証明する書類：氏名と 65 歳以上であることが分かる面のコピー。パスポート・免許証・健康保険証・住民票のいずれかとする。それ以外については要相談。

送付先 住所：〒162-0801 東京都新宿区山吹町 358-5 アカデミーセンター

日本語テスト学会 会員管理センター

電話：03-5937-0249 電子メール：  
jlta-post@bunken.co.jp

・提出期限：JLTA シニア会員に初めて申請する年の5月末。ただし、新規に会員になる方は、通常の入会申し込みと同時期に提出する。

3. シニア会員年会費：5,000 円（一般会員は 8,000 円）

## 4. 注意点

・次年度以降は、常勤もしくは非常勤の職に就いた場合、その年度の 5 月末までにその旨の変更を事務局に連絡すること。それ以外は自動的にシニア会員が適用になり、書類提出の必要はない。

- (3) 2019年9月12～13日（木・金）に**JLTA 第 22 回全国研究大会**が新潟青陵大学で開催されます。木村哲夫全国研究大会実行委員長、藤田智子研究会運営委員長、金子恵美子研究会運営委員会アドバイザー、印南洋研究会運営会副委員長が中心となっ

て準備を進めています。4 月に発表募集の案内を出します。発表申し込み締め切りは、例年は6月上旬ですが、今年は5月中になる可能性があります。最新の情報は JLTA のウェブサイト ([http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=18](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=18)) をご覧ください。

- (4) 2019年3月1日（金）に**第 48 回日本語テスト学会研究例会**が早稲田大学で開催され、活発な議論がなされました。今後の例会の情報は、以下をご参照ください ([http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=21](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=21))。

- (5) 『日本語テスト学会誌』**第 21 号**が発行され、12 月中にはお手元に届いたと思います。第 21 号まで過去の号すべてが J-STAGE (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal/-char/ja/>) で一般公開されています。

『日本語テスト学会誌』は、狭義のテストングに関するものだけではなく、広く評価に関する論文を募集しています。教育実践やプログラム評価に関するものなど、評価全般に関わる実験・知見を含みますので、どうぞふるってご応募ください。

- (6) 日本語テスト学会では、2019 年度より「**オンライン投稿審査システム**」を導入することになりました。このシステムは、2014 年度から学会業務の一部を委託してきた国際文献社が持つもので、投稿と査読の過程がオンライン上に記録されます。さらに、学会誌の一層の質の向上を目指して、既出版された論文のデータベースを使った投稿論文の剽窃の確認や、著者による論文の匿名化の再確認もシステムの中で行っていきます。国際誌ではこのようなシステムは一般的ですが、国内誌では一部にとど

まり、慣れていただくのにお手間を頂戴いたしますが、どうぞご理解の程よろしく願いいたします。このお知らせは、3月15日に電子メールでお送りいたしました。詳細は、次の通りです。

#### オンライン投稿審査システムに関する詳細

##### 1. 投稿期間

・導入に伴い、2019 年度のみ、以下の日程とします。この期間しか投稿ができませんのでご注意ください。

2019年5月26日（日）～6月2日（日）  
23:59

日本語テスト学会誌 編集事務局（問い合わせ先）

jlta-edit@bunken.co.jp

・2020 年度以降（予定）：4月7日～5月7日

##### 2. オンライン投稿審査システムによる投稿手順

・現在作成中のため修正はありますが、全体的には以下のような手順になります。

- ① アカウント作成（初回のみ、URL は後日通知）
- ② オンライン投稿審査システムにログイン、投稿を選択
- ③ 論文情報入力
- ④ 著者情報入力
- ⑤ 論文・資料のアップロード
- ⑥ 投稿内容確認
- ⑦ 投稿完了

##### 3. その他

・投稿者には、オンライン投稿審査システムを原則ご使用いただきますが、使用が難しい場合は、2019 年度に限り、上記の編集

事務局の電子メールに添付しての投稿も可能です。

- ・学会誌執筆要領について、本システムの導入により一部変更があります。最新の執筆要領をご覧ください、ご遵守ください。
- ・投稿期間の変更により、学会誌の配布が 1 ヶ月ほど遅れる予定ですが、ご理解いただければ幸いです。J-STAGE には早めに掲載するようにいたします。
- ・査読については、オンライン投稿審査システムで査読者割り振りなどを行いますが、査読のプロセスは今までとは変わりません。

最新情報は以下へ：[http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=62](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=62)

- (7) **JLTA 研修講師派遣事業**が 2017 年度から始まりました。本事業は、テスト利用・作成に関わる研修を行う機関・団体に JLTA より講師派遣を行うものです。JLTA 研修講師派遣委員会を中心に進めましたところ、2017 年度は 1 件依頼があり、スタッフ・セミナーへの派遣を行いました。2018 年度の依頼は、残念ながら 0 件でした。会員の皆様におかれましては、言語テストにご興味のある方々へご周知くださいますようお願いいたします。

ウェブサイト：<http://jlta2016.sakura.ne.jp/?p=929>

- (8) **JLTA 最優秀論文賞**は *JLTA Journal* 発行後に決定し、表彰は翌年の全国研究大会で行っています。

2018 年度の実賞者は、平井 明代氏（筑波大学）です。ご受賞おめでとうございます。

#### **2018（平成 30）年度日本語テスト学会最優秀論文賞**

著者：平井 明代氏

論文タイトル：The Effects of Study  
Abroad Duration and Predeparture  
Proficiency on the L2 Proficiency of  
Japanese University Students:  
A Meta-Analysis Approach  
([https://www.jstage.jst.go.jp/article/jltajournal/21/0/21\\_102/\\_article/-char/en](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jltajournal/21/0/21_102/_article/-char/en) 参照)



## (9) その他

- 会員情報や会費納入状況の確認・修正ができる「マイページ (<https://www.bunken.org/jlta/mypage/Login>) 」はご利用いただいていますでしょうか。ログインに必要な会員番号やパスワードを紛失された方は以下からお問い合わせください (<https://www.bunken.org/jlta/mypage/Contact>) 。マイページ内の会員向けページにおいて、ジャーナル・ニュースレター等の掲載があります。
- 所属や書類発送先など登録情報にご変更がある場合、マイページでの登録情報の変更を3月末までをお願いいたします。学生会員の方には、毎年学生証のコピーをご提出いただいています。
- 2017・2018年度の会費振込について、これからの方は早急によりしくをお願いいたします。2017年度分のお支払いがない場合には、

2019年4月より送付物の発送や電子メールの配信がなくなり、マイページの使用もできなくなります。

- 本会の退会を希望される方は、事務局 ([jlta-post@bunken.co.jp](mailto:jlta-post@bunken.co.jp)) へご連絡をお願いいたします。

文責：

JLTA 事務局長 小泉利恵 (順天堂大学)  
JLTA 事務局次長 片桐一彦 (専修大学)  
横内裕一郎 (弘前大学)  
深澤真 (琉球大学)

日本語テスト学会 (JLTA) 公式

Twitter アカウント: @JLTA\_official  
[https://twitter.com/JLTA\\_official](https://twitter.com/JLTA_official)

## Messages from the Secretariat

We are thankful for your support of and commitment to JLTA's activities. Please send us any comments or inquiries you may have. Please see our English website for more details:

[http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=599](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=599)

- (1) As mentioned in JLTA Newsletter No. 45, the **2018 General Business Meeting** was canceled along with the 2018 Annual Conference scheduled to take place on the 8th and 9th of September at Hokkai-Gakuen University, due to the Hokkaido earthquake, which occurred on the 6th of September. The 2018 General Business Meeting was held on the 1st of December at Chuo University, along with the Lecture by the JLTA

Best Paper Awardee. The following items were approved at the meeting. The approved documents were emailed to JLTA members on the 25th of December.

1. Activity report for the 2017 academic year
2. Activity plan for the 2018 academic year
3. Financial results for the 2017 academic year
4. Budget for the 2018 academic year
5. Revision of the Constitution
6. List of officials and committee members in the 2018–2019 academic year

(2) We are pleased to announce that JLTA is going to introduce “**senior membership**” from the 2019 academic year. With this system, the membership fee will be reduced for senior members so that JLTA will be supported by a wider range of members. We believe that it will contribute to the further development of JLTA. This announcement was emailed to JLTA members on the 18th of February. The guidelines for senior membership are as follows:

#### JLTA Guidelines for the Senior Membership

1. Senior membership qualifications
  - A person who (a) is 65 years old or older on April 2 in the year when the application form is submitted and

(b) does not hold a full-time or part-time position.

2. Procedures for becoming a senior member

-Fill out the JLTA Senior Membership Application Form (see [http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=122](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=122)), which verifies their age and their unemployment status.

-Submit it to the JLTA administration office by post.

Material for age verification: Copy of the page(s) of the document that can prove a member’s name and that they are 65 or older, such as a copy of a passport, driver’s license, health insurance card, or resident certificate. If an applicant would like to submit another type of document, email the JLTA administration office.

Address: Academy Center,  
358-5 Yamabuki-cho, Shinjuku,  
Tokyo 162-0801

JLTA administration office

Tel: 03-5937-0249

Email: [jlta-post@bunken.co.jp](mailto:jlta-post@bunken.co.jp)

-Submission deadline: The end of May of the year when an applicant applies for senior membership. A new member needs to submit the document around the same time of JLTA membership registration.

3. Annual senior membership fee :  
5,000 yen ( Annual regular membership fee: 8,000 yen)

#### 4. Note

-When a senior member holds a full-time or part-time position, he/she needs to contact the JLTA administration office by the end of May of the same year. Otherwise, a senior membership is provided onward automatically and there is no need to resubmit the document.

#### (3) **The 2019 22nd Annual Conference**

is scheduled to take place in September 12 (Thursday) and 13 (Friday), 2019, at Niigata Seiryō University in Niigata City, Niigata Prefecture. We appreciate the deep commitment of Tetsuo KIMURA (Conference Chair), Tomoko FUJITA (Committee Chair), Emiko KANEKO (Advisor to the Committee), and Yo IN'NAMI (Committee Vice Chair). We will announce the call for papers in April. The deadline to respond to the call for papers may be in May (although it has been in early June in past years). The latest information can be found at [http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=18](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=18)

#### (4) **The 48th JLTA Research Meeting**

was held at Waseda University on the 3rd of March (Friday), at which there was a lively discussion. Please see [http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=21](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=21) for future meetings.

#### (5) **The JLTA Journal Vol. 21** was

published and sent to members' registered postal addresses last December. This volume as well as previous volumes was uploaded onto J-STAGE (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal>).

**The JLTA Journal is inviting various types of contributions** that include studies related to evaluation in a broader sense, such as classroom-based practice and program assessment that deal with issues and topics on testing and assessment.

(6) We are pleased to announce that JLTA is going to introduce an **"Online Submission and Review System"** from the 2019 academic year. This system is organized by the International Academic Publishing Co., Ltd., which JLTA has commissioned part of JLTA's administrative work since 2014. Within this system, all submission and review processes will be recorded online. Furthermore, to improve the *JLTA Journal's* quality, submitted manuscripts will be checked for plagiarism using a database of published articles and for anonymity using human resources. The newly introduced system is similar to what international journals employ but may not be common to journals published in Japan. Thank you in advance for your understanding of the new online system. This

information was emailed to JLTA members on the 15th of March.

Details about JLTA Online  
Submission and Review System

1. Submission period

-We accept submission only during the following period in 2019:  
May 26 (Sunday) to June 2 (Sunday), 23:59.

Contact information of the JLTA editing office:

jlta-edit@bunken.co.jp

-We plan to accept submission during the following period in 2020 and onward: April 7 to May 7.

2. Procedures for submitting a manuscript using the Online Submission and Review System

-Despite some possible modifications, the basic procedures are as follows.

(a) Create your account (only for the first time you log in; the URL for this website will be notified later).

(b) Log into the system; select "Submission."

(c) Input your article information.

(d) Input all authors' information.

(e) Upload your manuscript and related materials if any.

(f) Check your submission information.

(g) Completion of the submission.

3. Note

-Authors are required to use the system. However, they can make submissions to the JLTA editing office attaching their articles via email in 2019, if the system is difficult to use.

-The Guidelines for Contributors to the *JLTA Journal* has been revised due to the introduction of the system. Please see and follow the latest guidelines in case you consider submitting.

-The journal publication and distribution will be delayed by approximately one month due to the change in the submission period. The journal files will be uploaded onto J-STAGE earlier than the distribution.

-The review process will be the same while a Chair of the Journal Editorial Committee will use the system to determine reviewers and allocate review work to each reviewer.

Please see [http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=62](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=62) for details.

(7) We have started **the JLTA Training Lecturer Dispatch project** since 2017, which aims to send a lecturer from JLTA to institutions and organizations that would like to hold a training session or meeting on test development and use. Thanks to the efforts of the JLTA Training Lecturer

Dispatch Committee, one institution used this system and one lecturer was dispatched to their staff meeting in 2017. Unfortunately, no such request was made in 2018. Please feel free to convey this information to those who may be interested.

Website: <http://jlta2016.sakura.ne.jp/?p=929>

(8) JLTA determines a winner for **the JLTA Best Paper award** chosen from papers published in the latest issue of the *JLTA Journal*. The award is conferred at the annual conference in the following year. We are pleased to announce the award recipient for the 2018 JLTA Best Paper Award.

The 2018 recipient is Akiyo HIRAI (University of Tsukuba).  
Congratulations, Dr. HIRAI.

Title: The Effects of Study Abroad Duration and Predeparture Proficiency on the L2 Proficiency of Japanese University Students: A Meta-Analysis Approach (see [https://www.jstage.jst.go.jp/article/jltajournal/21/0/21\\_102/\\_article/-char/en](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jltajournal/21/0/21_102/_article/-char/en))

#### (9) Other information

- Have you visited the “My Page” site (<https://www.bunken.org/jlta/mypage/Login>), where you can check and modify your membership information and check your yearly membership fee payment status? Please contact

us (<https://www.bunken.org/jlta/mypage/Contact>) if you need your membership number and password, which are necessary details for the login. You can access recent *JLTA Journals*, previous newsletters, and other materials specifically for members on the “My Page” site.

- If you have changes in your affiliation, address, and other information, please update your registered information on “My Page” by the end of March. We annually send student members a message asking them to submit a copy of a student certificate.
- If you have not yet paid the yearly membership fee for 2017 and 2018, please do so at your earliest convenience. If you do not pay the fee for 2017, you will receive no shipment or email message from JLTA and will not be able to use the “My Page” site after April 2019.
- If you plan to leave JLTA, please let us know by sending a message to [jlta-post@bunken.co.jp](mailto:jlta-post@bunken.co.jp)

**JLTA Secretary General**

**Rie KOIZUMI (Juntendo University)**

**JLTA Vice Secretary General**

**Kazuhiko KATAGIRI (Senshu University)**

**Yuichiro YOKOUCHI (Hirosaki University)**

**Makoto FUKAZAWA  
(University of the Ryukyus)**

JLTA Official Twitter account:  
[@JLTA\\_official](https://twitter.com/JLTA_official)

[https://twitter.com/JLTA\\_official](https://twitter.com/JLTA_official)

＜編集後記＞

編集を行いながら、ふと窓の外の景色に目をやると、桜が少し開花していました。年々開花が早くなっているのはやはり温暖化の影響でしょうか。温暖化がこれ以上進むと学校行事や教育内容も変わってくるでしょうか。そう考えると教科書やテストも... と考える今日この頃です。平成最後の JLTA Newsletter 発行にあたり、寄稿してくださった皆様に心より感謝申し上げます。2019 年度もよろしく願いいたします。(KM)

次のような原稿を募集しておりますのでどうぞお寄せください。1) 海外学会報告, 2) 書評, 3) 研究ノート, 4) 意見, またその他当学会員の興味関心に沿ったもの。



日本言語テスト学会事務局  
〒270-1695 千葉県印西市平賀学園台 1-1  
順天堂大学さくらキャンパス  
小泉利恵研究室 TEL: 0476-98-1001(代表)  
FAX: 0476-98-1011(代表)  
e-mail: [rie-koizumi@mwa.biglobe.ne.jp](mailto:rie-koizumi@mwa.biglobe.ne.jp)  
URL: <http://jlta.ac>

編集： 広報委員会  
委員長 宮崎啓（東海大学）  
副委員長 古賀功（東海大学）

委員  
飯村英樹（群馬県立女子大学）  
笠原究（北海道教育大学旭川校）  
齋藤英敏（茨城大学）  
長沼君主（東海大学）